

## 『大久保利通文書』の問いかけるもの



紀田 順一郎

維新・明治史研究の上で『大久保利通文書』十冊が必須の文献であることはいうまでもない。今度あらためて通読してみたが、没後五十年を経た時点で、よくこれだけの関係文書を蒐集整理して、的確な編集をほどこしたものと感じ入らざるを得ない。

私の関心分野に手紙と日記があるが、文芸一般と異なり、政治家の場合はいわば業務書簡と日誌であるから、心情的なコミュニケーションが主目的ではないが、重要かつ緊迫した情勢下には、当事者の息づかいが感じられることは当然であろう。大阪会議のような地味な個所にこそ、その辺の消息を窺うことができるのも興味深い。

明治八年（一八七五）正月三十日、大阪にあった大久保は、伊藤宛につきの書簡を送った。「帰東差急キテモ無詮候二付多分来月十日頃迄ハ延引可仕モ難凶」（東京へすぐ帰るのもどうか。たぶん来月十日までは延びるやも図り難い。）大久保は佐賀の乱を冷徹果断に詮議したとはいえ、政府内部の分裂と混乱は覆いがたく、新政府最大の危機を自覚していた。参議を辞していた木戸孝允や板垣退助らと妥協を図るしかない。井上馨らの根回しも十分でないまま、急遽大阪に向かい、まず伊藤博文と接触、ついで板垣と木戸のかつぎ出しにかかる。とくに強硬な木戸に対しては、事前に伊藤に接触を依頼、会議に出るといふ内諾を得たので一安心、伊藤に右の書簡を送る。しかし、じつは東京では守旧派の島津久光が反抗的姿勢を表面化させてきたので、一日も留守にしたいくない心

境にあった。この短い一節に「あと十日間で何としても決したい」という迷いと焦りの色が見える。

当時は電話がないので、手紙と予告なしの訪問しかない。たがいに所用などで行き違い、なかなか顔が合わない。時々刻々の交渉の動き。ようやく出馬の意向を固めた木戸が伊藤に案内され、大久保を滞在先に訪ねたことから事態は急展開、木戸から正式会談の申し出がある。これに対する大久保の返書が、さきの予想通り、びったり十日後であるところもすがすがしいが、一字一字に隠しきれない喜びが躍動している。「委詳細高話拝承奉厚謝候扱明十一日午前十二字ヨリ加賀伊へ参上候様御示聞趣承知仕候必同刻ヨリ出頭可仕候此段御請早々唯今帰寓御答延引御容恕所仰候拜白」（ご高話を詳しく拝聴し厚く感謝しております。明十一日正午より加賀伊へ参上するようご指示あったと聞き、承知いたしました。必ず定刻に出頭つかまつるべくこのことをお請けいたします。ただいま帰宅したばかりなのでご返事遅れましたことをどうかお許しくださいませよう）というもの。傲岸とされる大久保にこの反応。宛名も「孝允尊台下」である。

翌日、板垣、伊藤を含めた会議が行われ、大久保の妥協があつて、立憲制採用がきまった。ちなみに「加賀伊」は木戸の定宿で、彼はこの会議の成功を祝って「花外楼」と改称させた。楼主の伊助は正義漢で、幕末に多くの志士を援助した（いまも北浜で栄える花外楼の資料室には、往時の伊藤や木戸の書簡が大切に保存されている）。

武田泰淳は「政治家の文章は、たえず私たちの頭上におっかぶさるような暗さがある」といったが（『政治家の文章』一九六〇）、明治元勳の書簡はまたナイーブで、喜怒哀楽の表情を感じ取ることができる。そのことは私たちを一種の安堵に導くと同時に、後世の悪しき傾向がいつごろから生じたのかという問題意識へと導く。『大久保利通文書』のような一級史料が問いかけるものは、無限といわねばなるまい。

限定三百部復刻

## 全十巻



# 大久保利通文書

日本の誇り、再発見！

■すべての大久保利通文書に【解説】【按】などの「注」あり  
■新作「人名索引」を別冊添付 ■口絵写真六十点を追加

マツノ書店



卷 四 (慶應二年四月)  
候頓首拜具

四月二日

木戸先生

侍史

追々乍紙端諸君に宜敷御鳳聲被成下候様乍憚奉願候

【解説】木戸ヨリノ書翰ハ曩ニ薩長聯合協定ノ爲メ上京シタル際欸待ヲ受ケタルコトヲ謝シタルナリ文中ノ「京攝」ハ朝廷ト幕府ノ意ニテ「不熟」ハ朝廷幕府間ノ不和ヲ云フ「一會」ハ一橋慶喜ト京都市護職松平容保ニテ「必不遠面白機會」云々ハ幕府ノ自滅ヲ豫想シタル語カ黒田ハ清隆村田ハ新八川村ハ純義ヲ云フ黒田ハ曩ニ木戸ヲ送リテ山口ニ往キシカ歸京後又山口及ヒ廣島ニ出張ヲ命セラレタルモノニテ村田ト川村ハ長藩カ薩藩ノ名義ヲ以テ購入セシ汽船ユニオン號ニ關シ海援隊トノ紛擾ヲ生シ

三百六十二

大久保一藏

本書最大の特色は、各文書に付してある、至れり尽くせりの【解説】と【按】にあります。行数にして全体の二割に及ぶこの注を読むだけでも、大久保が激動の時代を快刀乱麻に切り開いていくさまを、内側から垣間見る思いです。

卷 六 (慶應三年十一月)

三十八

【解説】本書中新撰組云々ニ一條「下アルハ時局ノ切迫ニ隨ヒ新撰組ノ徒横行スルヲ以テ公ヨリ警戒ヲ注意セラレタルナリ兩卿ハ中山正親町三條二卿ヲ云フ利通ハ是ノ日兩卿ニ謁シ慶喜眞ニ反正ノ實ヲ表セサル限リ討幕ノ勅旨ハ變スヘカラサルコトヲ具陳シタルナリ

一四三 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十八日

(岩倉家文書)

【按】公ノ來書ニ答ヘ且ツ中岡慎太郎ノ死ヲ悼ミタルナリ

尙々今日迄尾ハ是非面會ハズ度与ニ事ニ而書カ出會仕答ニ御坐候今朝々御直書拜領被仰付難有拜見仕候今晩云々ニ一條何も差支無御坐候付以都合從此方御案内可奉申上候石川もかくなり候由實ニ以可慨可惜事ニ奉存候此段御受答奉申上候勿々宜補御執成置可被下候已上

十一月十八日

大久保一藏

岩倉老 公

近侍中様

【解説】今晩云々ハ岩倉公ヨリ利通ニ面會ヲ申入レラレタルニ對シ差支ナキ旨ヲ答ヘタルナリ石川ハ中岡慎太郎ヲ云フ十五日刺客ノ爲メ重傷ヲ負ヒタルカ途ニ死シタルナリ尙々書尾ハハ名古屋藩ノ重臣ヲ指スコノ際岩倉公ハ利通ヲシテ尾越兩侯ノ朝幕間周旋ノ運動ヲ阻止セシメントセシカ利通ハ尾藩ヨリ會見ノ申込アリシヲ幸ヒ其要求ニ應シタルナリ

一四四 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十九日

(岩倉家文書)

【按】岩倉公ヨリノ來翰ニ答ヘタルモノナリ

唯今歸宿仕御書奉拜見候夜前ハ御入被爲下難有奉存候

一長家老末家召ニ處被止候儀實否奉伺置候處正三卿より云々ニ義爲御知

内容見本  
(80%縮小)

卷 六 (慶應三年十一月)

四十

被下候由奉拜承候此條誠ニ無存掛事ニ而大ニ手順齟齬仕候事ニ御坐候一正三卿短筒ニ儀委細奉長候當時第一ニ御方様必要ニ御品御坐候間片時も無クテハ不叶事ト奉存候ニ付私持合ニ品可差上從此方爲持上候可然哉御都合も可有之ニ付一應奉伺候

一坂本首メ暴殺ニ事彌新撰ニ無相違向被聞申候近日來益暴ヲ働候由第一近藤勇カ所爲ト被察申候實ニ自滅ヲ招ニ表カト被存中候

十一月十九日

大久保一藏

老 公

執事中様

【解説】利通ハ忠義公カ甥是ノ月十三日發途ニ決セシヨリ先發シテ土藩ニ使シ十五日着京セリ然ルニ恰モ是ノ日坂本龍馬中岡慎太郎ノ二人ハ幕府黨ノ爲メニ京都河原町ノ旅寓ニ於テ暗

殺セラレタリ利通ハ其新撰組ノ所爲ナルヲ聞知シ彼等カ暴行ヲ以テ幕府自滅ノ兆ナリトシタルナリ當時幕府黨ハ大ニ復古派ノ舉動ヲ注視シ曩ニ利通等カ京都ヨリ歸藩ノ際モ新撰組ノ浪士等ハ之ヲ大坂ニ追躡シタリ故ニ利通等ハ上京スルヤ身邊ヲ警戒スルノ必要ヲ感シ護身ノ爲メ常ニ短銃ヲ用意シ且ツ岩倉公ニモコレヲ贈リ切ニ警戒セラレンコトヲ進言セシカ公ハ大ニ其厚意ヲ謝シ其ノ使用方ノ説明ヲ乞ヘリ而シテ此ノ書ニ依レハ岩倉公ハ同志ノ正親町三條實愛卿ニモコレヲ携帶セシメンコトヲ以テセシモノ、如シ故ニ利通ハ直ニ自己ノ分ヲ正三卿ニ贈リタルナリ書中ノ近藤勇ハカノ有名ナル新撰組隊長ナリ岩倉公ハ此書ニ答ヘテ短筒ハ直ニ正親町三條卿ニ贈ラレタキ旨ヲ以テシタリ

【参考】其一 岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十一月十九日 (大久保家藏)



## 明治維新を知る宝庫

—「大久保利通文書」の復刻に寄せて—

国士舘大学文学部教授

勝田 政治

勝田孫彌『大久保利通伝』が「維新の元勳、明治政府の建設者」と評しているように、大久保利通は日本歴史上における最大の改革の一つであり、近代日本の出発となった明治維新をもっとも主体的に担った政治家である。明治維新は大きく二つの時期に区分できよう。前期が幕藩体制の崩壊期であり、後期が近代国家の形成期となる。そして、そこには実に多くの政治家が登場している。しかしながら、前・後期の全期間にわたり、一貫して中央政治の表舞台で活動した人物は、大久保以外には見当たらない。西郷隆盛や木戸孝允は、前期では目を見張る活躍をしているが、後期では次第に影が薄くなっていく。西郷は後期の征韓論政変で政府を去り、木戸も政変前後から病氣により政府から離れがちとなった。また、大久保の同志岩倉具視は、幕末には京都の中心から追放され、前期は表面での政治活動は不可能であった。大久保の足跡は、明治維新の全期間と重なるのである。

大久保は、開国にともない政治状況が流動するなかで「国父」島津久光のもと、薩摩藩を代表して朝廷や幕府および諸藩との交渉の前面に立ち、藩論を公武合体論から最終的に倒幕論に導き、朝廷の岩倉具視と結んで幕府や摂関制の廃絶を宣言する王政復古クーデターを画策し断行した。そして、明治新政府内において版籍奉還から廃藩置県を実施し、藩体制を解体させて中央集権を実現した後、西洋文明の摂取を意図した岩倉使節団の副使として欧米を視察した。帰国後に征韓論をめぐって西郷隆盛と袂を分かち、封建制度の解体には不退転の決意をもつてのぞみ、自ら創設した内務省を中心として近代化政策を推進する一方、外交面では台湾出兵や朝鮮開国問題、樺太・千島列島や琉球をめぐる国境の画定問題などの懸案事項に取り組んでいる。こうして幕末から明治初期の重要課題に深く関わった大久保は、積極的に情報収集に努めるとともに、彼のもとには多くの機密事項がもたらされている。とりわけ、一八七三（明治六）年の征韓論政変後、「大久保政権」と称されるように明治政府最高実力者の地位に登りつめ、以後紀尾井町で暗殺される一八七八（明治一）年までは、内外の諸政策が大久保のもとで立案・実施されることになる。したがって、『大久保利通文書』は大久保個人の記録にとどまらず、まさしく明治維新の史実を知りうる宝庫（基本史料）となっている。

『大久保利通文書』は、大久保利通の遺族である大久保利和（長男）・牧野伸顕（次男）・大久保利武（三男）らが、書翰・建白書・覚書などを精力的に収集し続けた成果である。大久保家が、島津家や岩倉家をはじめとする諸家から収集した文書（原本や写本）は、一八〇〇余点にも及んだという。勝田孫彌が一九一〇（明治四三）年から翌年にかけて、大著『大久保利通伝』を刊行できたのは、ひとえに大久保家が収集した文書の提供があったからである。その後も大久保家では、文書の整理編集を継続して四八巻にわたる原稿を作成し、大久保利通の五〇周年にあたる一九二七（昭和二）年から二九（昭和四）年にかけて、日本史籍協会（維新史料編纂会の外郭団体）から『大久保利通文書』全一〇巻として刊行した（史籍協会本）。

原稿の整理校正は、維新史料編纂官の薄井福治（一・二巻）と同編纂官補の森谷秀亮（三〜一〇巻）が担当した。出版にあたっては勝田孫彌が尽力し、森谷は大久保家収集文書以外に多くの公文書を採録している（森谷はその後、一九六六（昭和四一）年に日本史籍協会代表となり、明治維新関係史料集である膨大な同会叢書を復刻し、さらに続編を刊行した）。収録した書翰・建白書・覚書などの一点毎に「按」と「解説」を付し、「参考」として大久保宛書簡などの関係史料を載せている。島津家編輯所編集員有馬純彦による「解説」は、文書を読解するにあたっての手引きとなっている。

『大久保利通文書』の原本（写本）は大部分保存されているが、一部は散逸してしまっている。失われた原文書は、現在では『大久保利通文書』の中にしか残されていないことから、史料的价值は非常に高いものがある。史籍協会本はその後、二回（一九六七（昭和四二）年・一九九（同四四）年と一九八三（昭和五八）年）東京大学出版会より復刻されている（東大本）。しかし、東大本は史籍協会本に採録されていた口絵写真の大部分を削除してしまっている。今回の復刻は史籍協会本であり、貴重な写真資料も復刻されるのは喜ばしい。なお、新たに「人名索引」を付したことも一言しておきたい。

明治維新のみならずすべての歴史事象は、多角的に見なければならぬことは当然である。薩摩藩出身の大久保を中心として見ることに対しては、とかく「薩長史観」という批判が寄せられるが、大久保を抜きにして明治維新を語ることはできない。その意味で『大久保利通文書』は、現在でも明治維新史研究の根本史料なのである。研究者は徹底的に読み込むことによって新たな発見が可能であろうし、一般の人々も大久保の生の言葉を通して明治維新の史実に触れることができるであろう。



明治維新史学会会長

松尾 正人

# 『大久保利通文書』の復刻

維新の三傑と称される西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通。この三傑の中では、大久保の人氣が何故か低い。西郷は、勝海舟との江戸城明け渡し談判の立役者となった。木戸は、勤王の志士桂小五郎として活躍、京都祇園の幾松とのロマンが有名である。だが、大久保となると、佐賀の乱を引き起こした江藤新平を梟首に処している。板垣退助らの自由民権派からは、有司専制と糾弾された。そこから、大久保の冷徹、陰険、専制といったマイナスイメージが先行するようだ。

しかし、大久保の存在を無視して幕末・明治期の政治を論じることはできない。大久保は、慶応三年十二月の王政復古断行の前夜、及び腰な中山忠能や正親町三条実愛らの公卿を叱咤。岩倉具視を奮励してクーデターを成功させた。新政権発足後の明治三年十月もそうである。薩摩藩兵の不穏な動向が伝えられ、政府強化が課題となると、岩倉に対して「伏見戦争砲声中にある心持にて御奮励奉願度」と叱咤激励した。廃藩置県断行の際にも、大久保は岩倉の逡巡を危ぶみ、王政復古クーデターと「同様之心決」にあると伝え、「必狐疑なく御裁断」を強要。今日のままにして瓦解するよりは、寧ろ大英断に出て瓦解いたしたらんと、決断している。明治七年の台湾出兵後の危機的状況に際しても、みずから北京に出張し、清国との戦争を回避して有利に収束させたことは有名である。

この大久保は、明治十一年五月十四日に紀尾井坂で暗殺された。その日の朝、大久保は福島県権令に対し、十一年から二十年までを緊要の時期とし、「予不肖と雖も、百難を排して此志を遂行せんと欲す」と語ったという。死後には八千円とも二万円ともいわれる借金が残っていたようだ。

このような大久保利通については、残された研究課題が少なくない。維新を牽引した大久保の軌跡を明らかにする基本資料が、日本史籍協会から出版された『大久保利通文書』全一〇冊である。今回、入手が困難になった同書を、マツノ書店が復刻する。「〈政事家〉大久保利通」(講談社)の著者である勝田政治国土館大文学教授が、懇切な人名索引を附した。『大久保利通関係文書』(全五冊、立教大学日本史研究室・日本史研究会編)、『鹿児島県史料・大久保利通史料』(鹿児島県歴史資料センター黎明館)をあわせれば、大久保利通に関する史料の全容が把握できる。今回の『大久保利通文書』(全一〇冊)の復刻が、明治維新史研究の一層の発展に寄与することは間違いない。

## 解説以外では 索引と写真が新しい目玉です

■本書は、大久保利通の子息達が、正確な史料を残すべく膨大な歳月と費用を費やして作成した、史料編纂事業の一大成果です。初版は大久保の五十年忌の昭和二年、日本史籍協会から三百部限定で出版され、戦後二度にわたって東京大学出版会から復刻されました。

■今回は、本書初版の中でも特に大久保家の「特製版」だけに掲載されている口絵写真、計六十八点すべてを収録します。珍しい写真の数々の印刷は当時としては驚くほど鮮明です。また文書類はすべて全編が掲載されており、小さい文字ながら読むことも出来ます。日本史籍協会の初版もその復刻版にも、写真はごく一部しか収録されていません。

■本書に集められた大久保の文書は、嘉永四年(一八五二)の森山与兵衛あて借金証文から始まり、明治十一年(一八七八)五月十四日、暗殺される三十分前にしたためられた伊藤博文あての絶筆まで一千八百通余り。これらを年代順に並べ、さらにその間に約八百通もの諸氏の大久保あて文書や参考文献を挿入して、読者の理解を助けます。

■大久保の魅力は何といっても、藩の枠を越えた幅広い交遊関係にあります。手紙の宛名も、伊藤博文・岩村通俊・岩倉具視・大山巖・桂右衛門・川路利良・勝安芳・金井之恭・木戸孝允・黒田清隆・小松帯刀・五代友厚・西郷隆盛・西郷従道・三条実美・佐々木高行・税所篤・重野安繹・寺島宗則・外島機兵衛・得能良介・中根雪江・中井弘・松方正義・松田道之・前島密・宮島誠一郎・山田顕義・山県有朋・吉井幸輔・吉田清成等等、まさに維新の主役たちの名が並んでいます。

■九巻と十巻には大久保の詩歌集や日記補遺、諸氏の追悼詩歌などの他「地方制度改革案」や「使清弁理始末」といった多くの関係史料も網羅されており、興味は尽きません。

■今回復刻最大の目玉は、勝田政治編「『大久保利通文書』人名索引」です。本書に出てくる人名すべてを日本人と外国人に分け、五十音順に配列したこの索引によって、利用価値は画期的に高まるでしょう。この索引と、本書第十巻の「大久保利通文書索引」(各文書名に内容を略記し五十音順に配列。八六頁)を合本。併せてA5判約二百頁の別冊となります。

■本書は七月末完成の予定でしたが、全十巻の長丁場なので、間に梅雨が入ると、湿度の関係から製本に不都合を生じる可能性もあり、計画を一ヶ月延期しました。したがって、六月末の予約締切を待って印刷に入ります。

■「人名索引」は予約に限り頒価三千円(税・送料)で別売致します。■本書をご予約頂いた方には「確認ハガキ」をさし上げます。

■「児玉陸軍大將」とのセット価格は予約者に限り五万一千円です。但し「児玉陸軍大將」の発送が八月下旬になります。別に送料をご負担頂ければ、特価のまま七月下旬にお送りできます。

### ■体 裁

A5判上製函入 約五千七百頁 全十巻+人名索引

### ■定 価

七万円(税・送料)

### ■予約特価

五万円(税・送料)

### ■特価締切

本年六月末日厳守

### ■発 売

本年八月下旬予定

▼書店不卸 ▼分割敬迎 ▼返本OK  
山口県南門市銀座2-13  
☎0834-2295

販売元 **マツノ書店**

URL <http://www.matsuno.com>

九三八 黒田清隆への別啓書翰 明治七年十月卅日

(牧野家藏)

【接】償金五十萬兩ノ處分ニ關シ意見ヲ述ヘタルモノナリ

極密副啓

征臺ノ義舉タル内外人民ノ保護上ニ出蕃民ヲ化シテ人道ニ導キ將來航海者ノ妨害ヲ除カントノ一大美意ニシテ是我條理ノ撓屈セサル眼目ノ旨趣ナリ此道理ヲ有スルカ故ニ支那政府モ終ニ屈伏スルニ至リ各國公使等ニ於テモ我ニ左袒スルノ情ヲ來セシナリ故ニ此道理ハ不可失ノ至寶ニシテ益之ヲ貫徹セサルヘカラス然ルニ彼ヨリ資給スルトコロノ五十萬兩ノ金額將來如何ニ使用シテ可ナランカ此處分ニ依テ大ニ日本國ノ名譽ニ關係アレハ厚圖畫スルヲ要スヘシ小子聊慮ルトコロノ旨趣ヲ左ニ掲ク

一 十萬兩ノ金額ハ難民撫恤ノ名目トイヘル名ヲ假リタルハ衆人ノ知ル處

ナレハ死者ノ家族ヘ相當ノ扶助金ヲ給與シ難ヲ受資財ヲ奪ハレタルモノ等ヘ同斷分配スヘシ其餘金ヲ以征臺ノ將士死者ニ施シ且功勞アル者ニ酬ユルニハ不足ナカルヘシ四ヲ十萬兩ノ額ハ其用ニ供シ可ナルヘシ

一 四十萬兩ノ額ハ 奏聞ノ上

宸斷ヲ以テ受用セラレサル旨ヲ清國皇帝ヘ謝却アルヘシ如何トナレハ到底我趣意人民ヲ保護シ内ヲ惠外ヲ恤ノ他ニ出テサレハ建房道路ノ費モ亦之カ爲ナリ故ニ此額ヲ以テ支那政府我意ヲ意トシ我爲ストコロヲ爲シ一蕃民開導ノ用航客ノ安寧ヲ護スルノ資ニ充テハ

聖慮ニ於満足アラセ玉フハ疑フ可カラス因テ此四十萬兩ノ額ハ受用セラル、ヲ欲セサル處ナリ

右英明ニ非サレハ之ヲ視ルコト能ハス大斷ニ非レハ決スルコト不能幸ニ我

皇帝陛下英明絶倫ニ在シ大量果斷ノ

卷三十 (明治七年十月)

百五十九

天資ヲ具セラレ候得ハ若シ一タヒ

宸斷此ニ出テハ清國ノカ爲ニ氣ヲ奪ハレ各國ノカ爲ニ膽ヲ拔カルヘシ實ニ千載ノ美談古今ノ勝事ト謂ハサルヘケンヤ曾テ我馬關ノ償金英米兩國ノ可拂ノ殘額アリ當春政府斷然之ヲ消却シテ英國ノ貪心ヲ殆ント恥シメタリ米國議院ニ於テ謝却ノ公論アリトイヘル外各國ニ對シテ之ヲ實行スルコト能ハス然ルニ我國亞西亞ノ一小島ニシテ文明各國ノ未爲サ、ル處ヲ爲シ近清國ノ欸心ヲ取り遠ク歐米ノ意表ニ出テハ我國ノ盛名赫々トシテ輝ヘシ豈宇宙間ノ快事ナラザランヤ劍ヲ提テ敵國ヲ退治セシヨリモ此大斷ニ於テハ其功其利一層ノ高處ニ居ル可シ去ナカラ小子其任ヲ十分ニ盡スコト不能反ツテ措大ノ事ヲ説テ之ヲ掩フニ似タレハ他ニ向テ公言スヘカラサルノ情アリ然トイヘル國權ノ上ヲ論シ利害ノ間ヲ謀リ候テモ僅々タル四十萬ノ額ニ萬倍スヘシ是眼前ノ益ニハアラサルナリ

内容見本

(80%縮小)

再本文ノ趣意ハ之ヲ行フトイヘル西郷都督復命ノ上一言示サレシ上ナラテハ不可然候ニ付ソレマテハ先御合置下サル可シ

【解説】清國ヨリ受領スル償金五十萬兩ノ處分ニ付キテ利通ハ十萬兩ヲ戦死者遺族ノ扶助難民ノ撫恤及ヒ從軍將士ノ功勞賞典等ニ充テ殘額四十萬兩ハ宸斷ヲ以テ清國皇帝ヘ返却セハ彼ハ我カ高義ニ敬服シ各國モ亦驚歎スルニ至ルヘク國威ヲ海外ニ發揚スル上ニ於テ却ツテ功ノ多カルヘキ意ヲ述ヘテ廟議ノ斡旋ヲ求メタルナリ而シテ本書ハ談判成立報告ノ爲メ先發歸國セシメタル小牧昌業ニ托セルモノニテ日記卅一日ノ條ニ「黒田子ロノ一封ヲ小牧ニ托ス」トアリ

九三九 大臣參議への書翰 明治七年十月卅一日

卷三十 (明治七年十月)

百六十一

(處番類纂)

「倒幕の策士」から「明治の大宰相」へ

大久保利通文書



全十巻 付・人名索引

限定二百部復刻

号外



マツノ書店

# 大久保利通が撒いた種

萩市特別学芸員 一坂 太郎

大久保利通のリーダーとしての偉大さは、あの明治初期において出身藩にこだわらず、実力を重視して数々の人材を登用した点にあると思う。同じ薩摩藩出身で大久保の竹馬の友だった西郷隆盛は、確かに「情」の人だった。しかしそれゆえに同郷人の取り巻きに担がれて西南戦争を起し、壊滅していったのとは対照的である。

そんな大久保を語るのに、長州云々と言っている場合ではないのだが、やはりマツノ書店読者諸兄の中には、山口県郷土史との関わりに強い関心を寄せられる向きもあるだろうから、『大久保利通文書』全十冊を紐解きながら、二、三の気づきを述べておきたい。

大久保利通と一致協力し、スタートしたばかりの明治政府の権威を確たるものとすべく、その舵取りを進めた長州藩出身者は、参議の広沢真臣と木戸孝允である。特に広沢が明治四年（一八七二年）に暗殺されるや、木戸と大久保の緊張をほらみながらの連携が政府の主軸となつてゆく。

『大久保利通文書』には大久保から木戸あてが四十七通、木戸から大久保あてが十九通取められている。大久保の書簡は薩長提携直後の慶応二年（一八六六）四月、幕府側の京阪における情勢を知らせたものに始まり、明治十年一月、所労見舞いを謝したもので、まさに両雄の交流史といった内容になっている。

ただし維新後の木戸は健康状態がすぐれず、版籍奉還後の政策や、清国・朝鮮への使節派遣など、打ち出す政策もタイムミングが悪くて

上手くいかなかった。明治六年、いわゆる征韓論争で大久保と組んだ木戸は内治優先を唱えて西郷隆盛に対抗する。ところが木戸は途中でリタイアしてしまい、この事が最後まで踏みとどまって奮闘した大久保の以後の優位を決定的にした。

そうした中で、木戸派官僚の多くが木戸から離れ、大久保へと接近する。最も露骨だったのは、幕末から木戸の腰巾着だった伊藤博文だ。明治四年の岩倉遣欧使節団に加わり共に渡欧したあたりから大久保に近寄ってゆくのだが、木戸としては面白くなかったらしい。

かつて吉田松陰に「周旋家になりそうな」と評された伊藤は、確かに実務能力に長けていた。大久保は特にその点を重宝がり、工部卿や法制局長官などの要職を任せている。また、明治八年二月には、大久保体制に対する反発から下野した木戸を伊藤が説得し、大阪に呼び寄せて大久保と会談させるという調停役を務めるまでになっていた。

伊藤と大久保の間を往復した書簡は、『大久保利通文書』中の白眉だ。まず、その量に圧倒される。大久保から伊藤あてが二百五十八通（連名も含む、以下同）ある。これは、岩倉具視あての四百五十五通（意見書なども含む）に次いで多い。また、伊藤から大久保あても百五通が収められている。これだけでも一、二冊の本が書けそうな質量だ。

## 復刻業者の『大久保利通文書』

マツノ書店 松村久

二年前、私は仕事で初めて『大久保利通文書』を見て驚いた。全十巻・千八百通もの文書すべてに、【解説】【按】（ヒント）などの懇切な注が、本文と同じ大きさの読みやすい文字で付されているではないか。

こんなに整備された文書は初めてだ。専門外の読者にとつて、これは練達したガイド付きで高峰に登るようなもの。私は、大久保家の利通への思いが深くにじみ出ているこの注のためだけでも、本書を必ず自分が復刻しようと思った。

しかし当時の小社は山口県史料専門で、大久保関係書など見当もつかない。それでこの二年間、松原致遠編『大久保利通』、勝田孫弥著『甲東逸話』、同『大久保利通伝』と立て続けに復刻し、新しくお得意様を開拓してきたのである。

索引の有無は本の利用価値を左右する。この膨大な史料に、もし「人名索引」でもあれば鬼に金棒。さいわい『（政事家）大久保利通』（講談社選書メチエ）の著者・勝田政治氏が、この難行を快く引き受けて下さった。

仕事は順調にすすみ、いよいよ一般の反応を見るべく、学会誌や業界誌に一頁大の予定広告を出した。ところが先般お知らせしたように、なぜか直接の反応は殆どなかった。頁単価は類書の半額以下、「人名索引」まで付くので、五百部はいけるかと思っていたのに……。これでは三百も無理か。

でも見方によっては、あるいは小社がすでに潜在読者の殆どを開拓しているのかも。そして、その人たちは「パンフを

その他、長州藩出身者では品川弥二郎あて四通（品川より三通）、林友幸あて十二通、榎村正直あて五通、井上馨あて二通（井上より三通）、山田顕義あて二通（山田より一通）、山県有朋あて十通（山県より四通）、広沢真臣あて一通（広沢より三通）、周布政之助より一通、福原和勝より一通などが目につく。一概には言えないけれど、往復書簡の数量は各人と大久保との交流度合いを物語る。

以前、何げなく『大久保利通文書』の頁を繰っていて、偶然目に留まった書簡がある。第九卷十三頁以下に紹介された明治十一年二月六日、重野安繹にあてたものだ。重野は薩摩藩出身で、当時修史館の一等編修官。大久保は伊藤博文と相談したすえ、英仏の歴史編纂方法を調査させるには「末松謙澄」が「適任」だと思うので、上申書を提出させて欲しいと重野に依頼する。

末松は北九州出身で、太政官権少書記官などを務めていた。当時二十二歳。幾多いる候補者の中から末松に白羽の矢を立て、飛躍のきっかけを与えたのは、大久保だったのだ。

ちなみに大久保は三カ月後、東京において不平士族に暗殺されてしまう。一方、末松は帰国後伊藤の次女と結婚し、衆議院議員、あるいは毛利家歴史編輯所総裁となり、長州藩の維新史として不動の地位を誇る『防長回天史』を完成させたことは周知のとおりである。

そのように考えながら大久保の書簡を読むと、『防長回天史』の背景にも、どこかに大久保が撒いた種が存在しているような気がして、不思議な気分になってくるのである。

見てから」と思っておられるのかもしれない。

これまでもまして良いパンフを作らねば……。初めてお客様にコメントをお願いしたところ、おかげさまで力作揃いとなった。『大久保利通文書』はたしかに待たれている。

ここまで来て思いもよらぬ大事件。何と本書の初版本（今回の復刻原本）には大久保家の「特製版」があり、口絵写真の数が全く違うのである。普通の版はすべて口絵写真が計八点だけなのにこちらには六十八点もある。この中には、すでに原板の失われた貴重写真も多い。これは何とかしなければ。

「特製版」まで作っていたとは、さすが大久保家、と褒めてばかりはいられない。本書はすでに各巻の厚さに応じて、東見本やケースの外装なども準備しているのに……。

それにしても、早くからわかっていたら予価を六万円にしたものを……。でもここは、目玉が増えたことを喜ぶべきか。辛い大久保家では快くその貴重な蔵書を貸して下さり、万事ことなきを得て、この版を基に復刻することができる。

本書がこの先また復刻される可能性は皆無に近い。もしデジタル化されたとしても、それは書物とは似て非なるもの。片々たるコピーも含め、そんなものに維新の本質が映るわけもなく、まして大久保の魂までは絶対に伝わらない。

大久保の書き遺した生の文章を、注を頼りに精読するのは、先日小社が復刻した『殉難録稿』の血にまみれた末端とは逆の現場から、直に維新の核心をえぐることはないのか。

この腐りきった時代への反動で「宰相・大久保」への関心は日々高まっていく。本書はひょっとして三百部では足りないかも？

こうしてパンフを作りながら、業者の妄想はどこまでも広がっていくのである。